

故郷を出てから八年ぶりの懐かしい我が家に八月十六日帰り着く。

以来農業に従事、今日に至る。

私のシベリア抑留

岐阜県 林 正彦

昭和十二（一九三七）年、土岐市土岐津小学校卒業と同時に三菱重工業名古屋航空機製作所入社。

昭和十七年、徴兵検査、甲種合格。

昭和十八年、各務ヶ原飛行場大隊入隊の予定が変更になり、門司老松公園に集合、約七日間各民家に宿泊。下関港より釜山上陸後、鉄路で黒河省嫩江第九七飛行場大隊入隊。その後、新京（長春）、チチハル等で教育を受ける。戦況の悪化とともに遼陽飛行場大隊より多くの特攻隊員を見送ったことは、今でも忘れられない思い出である。

八月十五日、終戦を迎えるとともに鞍山の昭和製鋼

跡地に移動、ロシア軍の指揮下に入り、機械等の解体作業が始まり、莫大な機械のすべてがロシアへ向けて発送されて行った。正に国家あげての泥棒行為であった。これを戦争犯罪と言わず、何と言うか。

昭和二十年十月末、軍の命令により国家賠償として三年間の労役に服すると言われて、部隊長以下全員が鞍山アハルより乗車、満州里を經由シベリア鉄道でウズベキスタン・アングレンに到着、抑留生活が始まる。

現地へ入って驚いたのは、水のない全くの砂漠地帯であったこと、町全体が囚人の街であること、ドイツ人の収容されていた跡へ入るも、果たしてこんなところで三年、命がもつだろうかと思った。

作業は、炭鉱作業、煉瓦造り、道路作業等あらゆる仕事をやった。

ドロを固めた煉瓦の家造りが始まった。一日で乾燥させる誠に粗末なものだった。が、ともかく家ができ、街作りが行われた。

炭鉱は主として露天掘り、雨の全く降らないこの土地でよくも三年間頑張れたものだと思つづく感じる。

時に口にしたスイカ、メロンの味がたまらなく懐かしく思い出される。

抑留中の作業と出来事

岐阜県 長江 幸平

主として炭坑の石炭掘りであり、ロシア人の囚人と共同作業をしました。度々落盤事故があり、多勢の死者が出ました。

また、マラリアが蔓延し、多くの病人が出ました。それがその後どうしたのか一切我々には教えてくれませんでした。

発電所が近くにあったのを覚えています。

非常に雨の少ない土地で、夜、南京虫に悩まされ、外で寝たこともあります。

満天の星を眺めながら遠い故郷を偲んだものです。

ある時、仲間のツルハシが足に当たり右足を骨折したことがあります。幸いにも九州医大の外科の先生

の治療を受けることができ、助かりました。

一度、現地と先生の所へ訪ねてみたいと思っておりますが、今のところその機会がなく残念でなりません。

私のシベリア抑留

岐阜県 河合 猛

岐阜県土岐市駄知町生。

昭和十一（一九三六）年、瑞浪尋常高等小学校卒業。

昭和十八年九月、満州遼陽飛行場大隊入隊。

昭和二十年、終戦とともにシベリアに抑留され、ソビエト連邦アングレンにて炭坑等の作業に従事。

昭和二十三年二月、帰国する。

今、思い出してもゾットするような生き地獄を味わった。幸いにも命あって日本へ帰れたのは幸運だったと感謝している。